へ 5
1914

酒船集叙

黄門定家の卿の曰誹諧とハ利口那里と
あさむかぬやうにしへしんにしてものふかきを心ある
おいこゝめてのと物をいふを利口しおかしと
ありしよりハ誹諧といふ字をよみて滑稽とおもし
さ註し給へるもの也しかして今乃正風拂まされ
ハ滑稽ハ笛仲楚かかいふ捷人まきしか
此弁ハ一休和尚の人に文る教ひてきらん

門 へ5
號 1914
巻

うし是ハ人にあらし頃芭翁の上まてかゝりその誹諧
にして只利口明り今世に誹諧と浮かれハ留
まりの六波羅の上まてあかりて見るところハこゝろの
此葉の芭蕉乃葉にとゝめて有無へし漢
其まの誹諧歌と歌の字を添てまた北枝か
起へし誹社の字ハ別にハ未発して芭蕉に続
しふる人さまをかし　素堂ハ類句俊彬忠かり

時段西行家氏如何ゆゑハ宗祇言葉もとの吟ハ
専に筆其人をいましめ自ら其吟詠ハ一端
に打寄て深く感情を呻吟すに及ひて自ら
手斟に至り次西行宗祇の流を為人を閲し
こ其手宗鑑貞徳まて姫く芭蕉翁世人
さ時そのこゝろ乃に明し世つて事を知りの氣時
に翁出て古風翁周の風流世に行まて

まさしく道廣く此の道に時至らしめん之也芭
蕉翁出て奥の細道などの紀行宗祇の足跡を慕
ひ給ひて紀行數冊子及び連歌を
冬の日曠野五歌仙より猿蓑炭俵などの
集を新しく風流を起し正風の暗を照らし
旅し句は千歳不易の姿一時流行の変化を
もつはらの世に伝へられかたらく新しさを探り給ひ

しば〳〵ことはり讃するに猿蓑是なり抑此の道の姿上
代より今に至るまで滝宗鑑貞徳より起りて始祖
流之道を得て妙なる正風妙なるに入て志ありし
備はり今なほ人磐来人再生して説諫
あるひ給ふもの必ず掌を指すより外は稀なりま
さに誹諧の道はしかし翁の華今に世までの
里をん然に此の道の詠草遺稿旅泊の書捨

津々浦々にもれたる句を今拾ひもとめ書く写経の

ら次第集に出たるハ人の耳に觸はべれど幾

多くハ新古を分ちて尤同士の家に隠されて

章一紙をも求て細道に端書見へハのこる章を集て

泊船堂の芭蕉のひとりとはしぬ僕拙き

筆につゞけ孫に伝へ置魯奥の事ハ見る人按ずべし

義をして此後の芭蕉文章芭蕉の継発千

拾ひしるし金帯尚にして千端遣諸家珍を

まめく出しあまへかしらしのゝ媼

元禄拾一寅年初秋

風国謹識

泊船集巻之一

芭蕉翁道の記

千里に旅立て路粮をつゝまず三更月下無何に入と云けん
むかしの人の杖にすがりて貞享甲
子秋八月江上の破屋をいづる程風の声そ

ろ寒げなり

野ざらしを心に風のしむ身かな

秋十とせ却て江戸を指故郷

関越る日は雨降て山皆雲にかくれたり

霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き

何某千里と云けるは此度みちのたすけとなりて万いたはり心を尽し侍る常に莫逆の交ふかく朋友信有哉此人

深川や芭蕉を富士に預行

富士川のほとりを行に三つ計なる捨子の哀気に泣有この川の早瀬にかけてうき世の波をしのぐにたえず露計の命待まと捨置けむ小萩がもとの秋の風こよひやちるらんあすやしほれんと

袂より喰もの投て通るに

猿を聞人の捨子に秋の風いかに

いかにそや汝ちゝに悪まれたる歟母にうとまれたるか

ちゝは汝を悪むにあらし母は汝をうとむにあらし

唯これ天にして汝か性の拙きを泣け

大井川越る日は終日雨降けれは

秋の日の雨江戸に指折らん大井川　ちり

眼前

道のへの木槿は馬にくはれけり

二十日余の月かすかに見えて山の根際いと暗きに馬上に鞭をたれて数里いまた鶏鳴ならす杜牧か早行の残夢小夜の中山に至りて忽ち驚く

馬に寝て残夢月遠し茶の烟

松葉や風瀑が伊勢に有けるを尋音信て
十日ばかり足をとゞむ
暮て外宮に詣侍りけるに一の鳥居の陰ほの
くらく御燈處々に見えて又上もなき峯
の松風身にしむばかりふかき心を起して

晦日月なし千とせの杉を抱あらし

腰間に寸鐵をおびず襟に一嚢を懸て手に十八の
珠を携ふ僧に似て塵有俗にゝて髪なし
我僧にあらずといへども髪なきものは浮屠の
属にたぐへて神前に入事をゆるさず
西行谷の麓に流あり女どもの芋洗ふを見るに

いも洗ふ女西行ならば歌よまむ

其日のかへさある茶店に立寄けるに
てふと云けるをんなあが名に発句せよと云て白

を猶出しうまれに書付侍る

菜の花や蝶の翅まできえにけり

閑人の茶の会をとこひて

其挿て廿四五年乃あらし、のち

長月の初夜伊吹に帰りて北堂の世草ともしも

拾果帯ひて葬送の事なし何事もむかし

にかはりてゆかしからむ其姑堂にて眉皺寄て云命

有しもの言ハぬく云葉ハ忘れ申この事あり

守伊勢国叫さして世の家おのれと守ら

悲の子ら女しけ飛世の眉をもや老ゆらりと志

そらく泣て

手ま取らん之涕ん間らおつる秋乃初稲

大和国にて御し之て葛下の郡井の内と、ふ所

に至り候ふ時ハ僧の所より四里余りの人目にて

留りて足を休む籔より奥に家あり

綿弓や琵琶に慰む竹の奥

二上山當麻寺に詣て庭上の松を見るに凡千と
せを經たるならん大さ牛を隠すともいふへ
かれは非情といへとも仏縁にひかれて斧
斤の罪をまぬかれたるそ幸にしてたつとし

僧朝顔幾死かへる法の松

獨よし野ゝ奥にたとりけるにまことに山ふかく
白雲峯に重り烟雨谷を埋んて山賤の家處
處にちいさく西に木を伐音東にひゝき院々の
鐘の聲は心の底にこたふむかしより此山に
入て世を忘たる人のおほくは詩にのかれ歌に
かくるいてや唐土の廬山といはむもまた
むへならすや

ある坊に一夜をかりて

砧打て我に聞せよや坊か妻

西上人の草の庵の跡は奥の院より右の方二町計分入ほと柴人の通ふ道のミわつかに有てさかしき谷をへたてたるいとたふとし彼とくとくの清水は昔にかはらすとみえて今もとくとくと雫落ける

露とくとく心ミに浮世すゝかはや

若是扶桑に伯夷あらは必口をすゝかん もし是許由に告は耳をあらはむ

山を登り坂を下るに秋の日既斜になれは名ある所々ミ残して先後醍醐帝の御陵を拝む

御廟年を経て忍は何をしのふ草

大和より山城を經て近江路に入て美濃に至
るにいますや山中を過て古へ常盤の塚あり
伊勢の守武かいひける義朝殿に似たる
秋風とはいつれの所か似たりけん我も又

義朝の心に似たり秋の風

不破

秋風や藪も畠も不破の関

大垣に泊りける夜は木因か家をあるしとす
武蔵野を出し時野さらしを心に思ひて旅立
けれは

しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮

桑名本當寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝきす

草の枕に寝あきてまたほのくらきうちに

濱のかたへ出て

明ぼのやしら魚しろき事一寸

熱田に詣

社頭大に破れ築地ハ倒れて草むらに
隠るかしこに縄をはりて小社の跡をしる
し爰に石をすゑて其神と名のるよもき
しのぶ心のまゝに生たるぞなかなかにめでたき
よりもこゝろとゞまりける

しのぶさへ枯て餅かふやどり哉

名護屋に入道の程風吟ス

狂句木枯の身ハ竹斎に似たる哉

草枕犬もしぐるゝか夜の聲

雪見にありきて

市人よ此笠うらう雪の傘

旅人を見る

馬をさへなかむる雪のあしたかな

海辺日暮して

海くれて鴨の声ほのかなし　イ白し

爰に草鞋をときかしこに杖を捨て旅寝なからに年の暮けれは

年くれぬ笠きて草鞋はきなから

といひいひも山家に年を越て

誰か聟そ歯朶に餅おふ牛のとし

奈良に出る道の程

春なれや名もなき山の薄霞

二月堂に籠りて

水取や氷の僧の沓の音

京に登りて三井秋風か鳴滝の山家をとふ

梅林

梅白し昨日ふや寉をぬすまれし

樫の木の花にかまはぬ姿かな

伏見西岸寺任口上人に逢て

我衣にふしみの桃のしつくか（イせよ）

大津に出る道山路を越て

山路来て何やらゆかしすみれ草

湖水眺望

辛崎の松ハ花より朧にて

晝の休らひとて旅店に腰を懸て

つゝしいけて其陰に干鱈さく女

吟行

菜畠に花見顔なる雀かな

水口にて廿年を經て故人に逢

命ふたつの中に活たるさくらかな

伊豆の国蛭か小島乃桑門これも去年乃
秋より行脚しけるに我名を聞て草の
枕乃道つれにもと尾張の国まて跡をし
たひ来りけれは

いさともに穂麦くらはん草まくら

此僧予に告て曰円覚寺大顛和尚今年
むつ月の始遷化し給ふよし誠や夢のこゝち
せらるゝに先道より其角かもとへ申つかは
しける

梅恋て卯の花拝む涙かな

贈杜国子

白けしにはねもく蝶の形見かな

二たひ桐葉子かもとに有て今や東に

くたらんとするに
牡丹蘂ふかく分出る蜂の名残哉
甲斐の山中に立よりて
行駒の麦に慰むやどり哉
卯月の末庵に帰りて旅のつかれをはらすほどに
夏衣いまだ虱をとりつくさず
後にあまた賦和の句素堂の跋有今
畧之

泊船集巻之二
芭蕉菴拾遺稿
維陽　風國撰次
春之部
元日ハ田毎の日こそ恋しけれ
誰やらが姿に似たり今朝の春
元日ハ晝まて寝て餅喰ひそへしぬ

二日にもぬかりはせじな花の春

三日口を閉て題正月四日

大津絵の筆のはじめは何仏

京近き所にて年をとりて

薦を着て誰人います花の春

春立や新年ふるき米五升

人に家をかはせて我は年忘

年〳〵や猿に着せたる猿の面

芹焼やすそわの田井の初氷

若菜

菎蒻にけふは売かつ若菜哉

風麦亭

春立てまだ九日の野山かな

梅

網代民部の息ニ逢て

梅の木に猶やどり木や梅の花

山里は万歳おそし梅の華

子良館の後ニ梅ありけると聞て

御子良子の一もとゆかし梅の花

蒟蒻のさしみもすこし梅の花

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

かくれ家や月と梅

あひ翁六葉ニ梅林なりニ来り

かぞへ来ぬ屋敷々々の梅柳

むめが香にのつと日の出る山路かな

伊勢にて其の女亭

暖簾の奥ものふかし北の梅

いのニ堺下よりなにもいふなるやのかりける奥ニ

暑あり

香に匂へうにほる岡の梅の花

何亦新八かまつりの年一周忌に
又梅丸といへる幼子も失けるよし
一葉草のちくりいと楷代をかなめ
歌乃程おもひやられし

梅乃よ平むかしの一字は遠あり

餞乙が東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁
此人何のしみちへくたるを馬乃餞に
なおむつましきまゝにて

紫ふかき藪乃中なる梅の華

梅柳さそ若衆かな女かな
天和の比乃吟なり

鶯

うくひすや餅に糞する椽の上

鶯や柳のうしろ藪の前

う徃の夢を魂にねむるか嬌柳
此句ときみなしこの比なし

椿

鶯の笠落したる椿かな

柳

[illegible]の小柳のさくるしなへかな

からかさに押分見たる柳かな

八九間空て雨ふる柳かな　蕉

雲雀

雲雀なく中の拍子や雉子の声

永き日も囀たらぬひばりかな

栖去之弁以翔累々小文庫にみゆる

雲雀より上にやすらふ峠かな

雉子　高野にて

父母のしきりに恋し雉子の声

へびくふときけばおそろしきじの声

華

鶴下りるあとさしても津ゞ乃ゑん

陽炎

かげろふや柴胡の糸乃薄曇

枯芝ややゝかげろふの一二寸

伊賀新大佛之記　今略之

丈六尓陽炎高し石のうへ

春雨

不精さやかき起されし春の雨

春雨乃木下につたふ清水哉

春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏

猫きぬの男ほとゝもとんぬ雨の花

猫

さる方都瑠璃璃小歌まの不

憂てハ方ニ知ニ酒乃聖ヲ
貧ニシテハ覚ル銭ノ神ヲ

花に浮世我酒白く食黒し

右二句ハ延宝の末の吟なるへし

大和の国平尾村にて

花の陰謡に似たる旅寝哉

木のもとに汁も鱠も桜かな

此句にて歌仙有ひさこにあり

いかの玉ふる紀の庭ハそのことし南都
の八重桜乃辯升隣さしれけると
りひ給く行なりく

一里ハみれ花守乃子孫かや

西まとの出波行脚して葛城山のふ
もとをとをるまあの花ハさかりにて峯
くハつきとこ里にあるあけほの乃みれ
りなりとて艶なりけし給の神
のこうかほあしとい人の口さかなき
世まりひつくれた

猶又叟に菊子明神の歌
最中乃桃の中よりあらはる。
いつきの集ヶ咲しそこらぬ
よし野

花さかり山ハ日比乃朝ぼらけ
某納

たちやすし清世の山の櫻。

景清も花見の座にハ七兵衛。

西行像讃

捨はてゝ身ハなきものとおもへとも
雪のふる日ハ
さむくこそあれ花の咲日ハうかれこそすれ

花の雲鐘ハ上野か浅草か。

二月末ッ方諸題を給るとて西行の

なにとしるべ俗咲の作とう
あしせ
探る花ま二日の句はしられ
桜とたふと桜とろよせぬて哉
しし ね留くるの旨乃こころよ
ほかよ無味ぬ見とぞるひっ桜さよみの菜
春の頃い桜小作ある
騒別
此ころ雅とよ並まで番一具

種芋や花のさかりを売ありく
笠を路傍すてゝひとつ有さくれん
ちよ桜やるとおもしろく其の處
この句 琴ト 大鼓ト 笛ト かなし
作の替なし
観
春のいろみ見りつ花のいさ
其角か曰く此ハ上野の花をと
申しし あの年乃春吟して哉
病鶴の眺望なるしし。一聯二句の
格く句と覚て句となる

奈良七重七堂伽藍八重さくら

宗世平

花を宿にはしめ終りや廿日程

明日は檜の木とかや谷の老木のいへる事ありきのふは夢と過てあすはいまた来らす生前一樽のたのしみの外にあすはあすはといひくらして終に賢者の謗をうけぬ

さびしさや華のあたりのあすならう

ゑしりも似ぬ発句も出よ初桜

洒落堂の記畧て

四方より花吹入て湖乃海

吉野山の花見んとて伊賀の国より旅立しけるに萬菊の杜国と同行して萬菊と号て檜の木笠の表に戯書しけるとぞ

吉野にて桜見せふぞ檜の木笠

さまさまの事おもひ出す桜かな

此句故郷にて

山さくら風好しらぬ気ッかけ何
志もろくハ花の上あるる月も硬される

すくの茶　詞ハしくしき行まあり
めッこぎのこゝろかねまんんかれ
酒のしかするる人の徳し
月花をしなくら酒飲むとうが

三聖人の図

月花の是やまとれ主せまる

山花
山ふきや宇治の焙炉の匂ふ時
ほろしこ山吹ちるの瀧の音

涅槃
称えん絵や鮒も合まる珠数の音
いとしーえ

神垣やおもひもかけず涅槃像

留別

鮎の子のしら魚送るわかれかな

蛙

古池や蛙飛こむ水乃おと

二月吉日とて是猶か剃髪
入鶴門をよかえをと

ものむまは小櫛のそりし髪の南

菩提山

此寺のかなしさつけよ薢ほり

大和行脚のとふらしあまちと市と
かやふすかふ日の暮るゝをりかし
梅の花咲まれはかりと

草臥て宿かる比や藤の花

昔住れ

陳細ミ草うし浪千日清るゝれ

重三

青柳の泥にしたるゝ塩干かな

草菴子桃さくら門人に
其角嵐雪あり

両のてに桃と桜や艸の餅

深川乃草菴をゆつるとて

草乃戸も住かはる世や雛の家

梓呂丸

蔦飾さかりにわかれし小塚の苫竹

猶の乙

猫のこひ床にふし蘭の朧月

青飯しや川流に越る猫のつま

蝶

蝶の飛そら雪中の日影かな

起よ〳〵我友にせん

ぬる胡蝶

蛻子の賛
白魚や黒き目を明ス法の網
奈良へ下る故人に別る
二俣に別れ初けり鹿の角
二見の図を拝見侍りて
うたがふな潮の花も浦の春
物を神詠楽

紙の衾の記とも志らすまかりひかれ
題しらすて
木曽の情雪や生ぬく春の草
おとろひや歯にくひ当し海苔の砂
雀子と声なきかはす鼠の巣
大比枝やしを引すて一のかすみ
此句翁の所謂あるとしるへし
きしぬ賞ふにはいふへし

道細し相撲とり草の花の露

相撲とり草ハ菫草の事なり俗にしと書にも入ぬ詞の句なるや

行春を近江の人とをしみける

行春や鳥啼魚の目ハなみた

又首の句也

細道ニ有り

泊船集巻之三

芭蕉菴拾遺稿

洛陽風国撰次

夏の部

山崎宗鑑ヶ旧跡

有かたきすかたおかまんかきつはた

子規

須磨の蜑の矢さきに啼や子規

此句書は須磨ノ浦にて見し作る是は須
磨の蜑の舊跡に須磨を過せしを矢先に當
ちけ給ひて須磨寺のむかしにおもひ合せて吟
角まつや里

啼鳥正月は梅の花さけり　里

清く聞む耳に香焼て子規

那須にて

野を横に馬牽むけよ啼鳥

ほとゝきす須海に撫くお秦の村雨

ほとゝきす大竹原をもる月夜

子規声横たふや水の上

啼鳥啼く〱飛そいそかはし

烏賊賣の声紛らはし須

木かくれて茶摘も聞や啼鳥

京にても京なつかしや蜀魂

或人の一句忘り

ほとゝきす啼音や古き硯箱

鶯なくや五人のおや兜子

重古

ひやうつ睨て浮り負ぬ重　古

百年ても只一ッ葉の一葉かな

あら野ても一ッ葉を一ッかな　譲ぬ

あらしにく

灌仏の日に生れあふ鹿の子かな

笑

竹の子や稚き時の繪のすさみ

ほ毎　芭

うまさぬ雨海やほいむの菜の蜜

みのしの菜

うらみたる身やふてき物の及ひなし

ほ毎　浴

夢の末を藤ろくみ里の紅梅草かな

花の名を木しのほけるやすての宿

漁り火や船路酔ふて覚束な
　はせを
　　玉山の像
はるの日は物餞た襟も清くふる[illegible]
汐渡やはせをの翁 拝子
　小金山
松桜生川めてやはせを芭蕉乃筆

[illegible]
油の[illegible]かしき無料理の皆
　おかしく
五月雨や色紙へぎたる壁の跡
　二句の脇 月おかしかりけれや
　翁
[illegible]翁 此方二つまで取支藥翁
　但 先人之芳手書もまきけれや
[illegible]夕涼し翁の跡

ちらかさ宴と一夜千代の粧ひ
守りも残るも一つ浦波梅の里の寺
梅の里の梅むかしの雪や連歌堂
摘うる里の汗若菜ぬれし菜花
此日にほく若仙年の菊花まつる
黄清まつく
山ゝ飛や母を案し人梅の匂ひあり
ちらし菜の桑の木や切草編子切む
此月を河田にくの踏やかの泉ゝ中の風や
剣む編まや切むしや袴を留

五月雨

日の光や薹かい梅くさく紅雨
さこの梅にも集くたちやし海上川
大井川水かく岸の回塚卯氏の毛
五月雨の空梅き蓑大井川
第く草鴛鴦二葉栄桂

ちよみ毎出し給はめ鰹しるや水の空

五月や垂見る海棠のちらぬ　国

粽結ふ宮古顔布ちる

はこゝは娘分手毎に摘やさゝの播

五月雨ゝ鳴の浮巣を見てかも　古妓ほうちや竹ちる

あさ衣

ちさき海は高炉おちり茄子汁
見る宮國にしくの吟ある

七日羽の黒山りこ毎りらし面鶴の国中ある二重塚

欲のりしや山切つて狭のちる茄子

昼顔

昼顔り昼寝せしまの床の山

手もちよ昼顔咲ぬ仏のむま

昼顔は末つき涼みあちれや

粽

粽由ふかさけ年切ちきむ　実の好

あ憶の浴も一集まりぬる商まきの迹
ちゝ草に接ひみしも清き水にうつれ
ぬる玉や蛍しげ
柳や花の芽毎に絡む芽麓の巣（結

田ゝ魚
見引まゝ田の峡誦して
此浦のたゝし花や魚の田植こし
田うゑ物植ゑて言さ浦揚りかな
落日絶に漸しかし庭前に植へ浦田植ゑ
此文句皆以集ゆえ
併井の句まゝ此句の句なる句を便
蓮某

ひやしかに獲越海まゝ人て漁ねば
首の淵此まむやむ
空愁形子魚舟の蔓や海かむろ
雲の葉月山まく何山瀬く丹の山
大津舟 野亭
ひらしかに上る藤やこの水舟
蓮の香子目をあつけや酉のはな 皇
丹野里共舷寺前の寺に打ち小音もさ舟や
湖や是あかし生ちのも釣る途

大津湖仙にて

水鶏

此宿は水鶏も志らぬ扉かな

平安川ゟ竹さやまくそおかまこく
とまりかまて森泊

水鶏啼と人のいへばや佐屋泊

蝉

頓て死ぬけしきも見えず蝉の声

さびしさや岩にしみ込蝉の声

稲荷山

鷹の目もいまや暮ぬと鳴鶉

年菊

年菊や酔て[illegible]かれ

年菊干闘茸く[illegible]亀

年菊の[illegible]く越の[illegible]

見えて和の[illegible]伺や

涼

川中の杭木にすゞみ所涼しさよ

錢あまく象かの池すゞやかすし井

涼しさや海へ入れたる最上川

四条の川原涼とて夕月ころより有明の月過る比まで川中に床を並べて [illegible]

[illegible]

かは風や薄がき着たる夕すゞみ

[illegible] 人の [illegible]

涼しさを我宿にしてねまる住か

淵 [illegible]

阿 [illegible] 山や [illegible] 涼し

[illegible]

涼しさ [illegible]

維長

維長や露路経ぬれて海涼し

象潟

きさかたの雨や西施か合歓の花

西行桜

西行法し

象潟の桜は波にうつもれて

花の上こく蜑の釣舟

花の上漕か[illegible]

もつまり[illegible]

守たるや桜に涼む業ならぬ　浮

十八楼の池　鉢日池

瑞岩寺目に見ゆる楼に涼し

望明

涼しさを絵に写しけり堀の杉

湯殿を漬

足すれ東小松の中山にて涼

雲芝 ニテ

涼しさや垣(かきね)より松の梅林形

唐破風の入日や薄き夕涼み

詞書略し

秣負人を枝折の夏野哉

もろき人にたとへん花も夏野哉

折付を遊行の吟や

うき津梅の里を尋よ須磨の夢

何ゝしの旅泊

梅こゝ妻やをめあきの夢を寝の名

なかし

子規呼かけや鳴一ッ

す　海

春ならば桜毎を須や須磨の春

須ゝ松石の句の秋かせ中さかきまた

あら須今集めのあら須掛やはた

西華之像

鉄牛不二人の情

おもしろ切[illegible]瀬田や樋の香

竹酔日

梅も須ゝも竹植る日ねぶ芸[illegible]

一 おもしろうてやがてかなしき鵜舟かな
　　泊集にいはく
　名にしおふあの鵜飼といふを見侍らんとて
　暮かゝるほどさかひのまふ人〳〵あまたの舟
　漕侍る鵜舟をたのしみて

またやたぐひ長良の川の鮎なます
　たしき芸にはあらね
里風一ちる鵜舟にかへる桃も
　まろうど
鵜の瀬やたな摘も葉の包ひ
　かふし
同じ川の時や涼しき五月かな

清滝
清滝や波に散込青松葉
　波に落つ青松葉のこゝは清滝の
　遠くにありて
　嵐峡の水の流れそゝぐやかな河の流れ絶えず水の面も
　さきの滝にて絶えず清き
　なれは何や此のさま
　何かし山

六月や峰に雲置あらし山
　有渡の温泉
湯をむすぶ誓も同じ石清水
　八幡　龍雲寺
おもふ名も先にさく萩の花ざかり

一神六本首淡ケ起くり
毎ひ人の心まも淵よ推の前
ま人命の毎ひまもおもつゝ（平首の鵺　詠
此　隼山
塩さ流や古井の清水先百生
芋麺　屯かれまみくの吟りゆや
談打志ろうく小田の雨かる里
禮宗後むきの缘り類
園席もく何かん人の曾つき
東かれかきし海
盆淡やいつこ云との如かまし
わ梅の宗上ま豆くく
眉もきや酉ご親ましく五重紀

一千子の女海カ生れ成やこ家ニ園らとちまもうへ年
かもかきへてつめくし備れ成
おき人の小袖も今や虫干し
幻住菴　誹え接れ書二月り
先毎の世推の本も五存本五
佛頂禅師の菴に毎く
本遺きも菴を破れ更存本五
留　お
人くハさきあへく逃りて騎
いぬもも鱼し
おの句切

春のほとも終りつゝ世なれるゝ
かん二句
うき我をさびしがらせよかんこ鳥
詞は見えしぬ　紺笠
世の人の見付ぬ花や軒の栗
加　刈ゆ松ますおれ毎ますやとく
ことふ書て南蛮くさく名取き
武隈の松みせ申せ遅桜
いふもの餞別おくりけれは
桜より松は二木を三月越し
是加に言語なく
あつみ山や吹浦かけての夕涼
最上川
あつき日を海にいれたり最上川
あちさゐは
あちさゐや藪を小庭の別座敷
二字　新
梅若菜まりこの宿のとろゝ汁
まゆはきを俤にして紅粉の花

猿　立石

石の手や有明赤く露けし

蕉法己下云

宵に出て茶の木の楊子有明日に

鯉

鎌倉切生く如何なる

鯉煮しい有家人切酔はて鯉　其

萱草の露掛り

昔さに木芙蓉さしや碑前

椹の実や都の世話しくも夜

遠き初音の後をかやり下の

嫁の花橋まかけし花より散

秋月の光く出づる後の様子何見てありし

家宿に嫁の花と共に

其里茶雪や菊の花の色

花さくらし小なきり上の龍の橋

麦の穂や泪に染て啼雲雀

鶯や竹の子藪に老を鳴

柚の花や昔しのばん料理の間

青ざしや草餅の穂に出つらむ

大津木節亭

秋ちかき心の寄や四畳半

窓の秋や巣をまはしく鳥

泊船集巻之四

芭蕉菴桃青遺稿

雒陽 風國撰次

秋の部

越後の国高田医師何某亭にて

薬園にいつれの花を草枕

はつ秋や畳なからの蚊屋の夜着

享保紀六日越常の梅ニゟ小沢

七夕

苔藪の蓑はしも星の契

出のさゝきにく

あら海や佐渡ニ横たふ銀河

至興云此寓ニ去ヌ哉秋風有初秋七日夜
星子句ヲ小子ニ譲らる哉

望　喜亭

毎ゝゝや秋を定るはし他の枕

素堂の母七十ニ余條星七峰の秋七日

七日素堂は深川蕉翁素堂七種ノ深川の客此人此傍ゟ家を婦
深川より七望の〔illegible〕

七株の萩の千本や星の秋

萩　芒

かゝ小雲にく

志ほらしき名や小松吹く萩芒

萩ちるや一輪〔illegible〕

此日後ニ〔illegible〕

山の栗の〔illegible〕

木犬

犬

すゝ

胴も一輪〔illegible〕萩の声

下り掘まきこて〔illegible〕

いさ秋もれ海道に付い見えさりつき
しら露被麗ぞ移りゆかぬ
生ミ鳥直し
ひと娩し生枯露はしや女子　茱
宗は出ら名拙守志う嬉の墓　象
出付お出後らふりまぬ
毎年るつ里
加賀の国を通るさとく
鯉野りあかまきやいつの毎業

意出に似る焼場の日晴かおそ
名盡気が出海り生以りせきゝて
料あらぬ来てお出のう意おかき
料　真
男　賤　文生出邦らの子庫こ返
新紀や重生復お行道の垣
先生ら歌書しま様
新来お
藤ある社
三益生傾けみ年

秋萩に酒売声も山寺の香
秋萩や飛に侘しみ野辺の香

稲妻

此句初五も前後に見えて候也

あの世とも稲妻先に浄土の香
稲妻や闇の方行五位の声

二季

稲妻の顔へ消て闇の紙燭

稲妻に悟らぬ人の貴さよ

此句の詞は先集にも見えて候也

凝骨積聚了

稲妻や顔のところか薄の穂

此句詞あまた後撰にも見えて候也

秋風

あかあかと日は難面も秋の風
秋風の吹けとも青し栗の毬

那谷の観音まうて

石山の石より白し秋の風

加賀山中桃妖に名を得させ給ひて

桃の木の其葉ちらすな秋の風

一笑といふものは此道に好る名のほのきこえて世に知人も侍りしに去年の冬早世したるよし其兄追善を催すに

塚も動け我泣声は秋の風

牛部屋に蚊の声くらし秋の風

座右の銘

人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ

物いへば唇寒し秋の風

西東あはれさおなじ秋の風

笠寺千手ハ岩の絶所にて　書
深川に送り給ふ人々の餞ありけり
旅立て西行の跡出給ひしや

月

大顔輝の筆勢に似たり

何里ぞ
何処を走りても嵯峨三ヶの月
跡付ものの事や五十字を付る
のトありぬ

重ね餞之辞

今[illegible]少子
[illegible]

僕や嬉しやうれしき主の春

十六夜雨もちらしなの影かな

元禄二年ほるゝの旅にて
我ら此の比神ある諸行に往きて植河上人の
言偽をきく

白浪し遊糸の指東和の上

雲おしく人の体和日見の哉

望ねし空人まえぬくるるかな

見渡しや寝やまつ〳〵もおかはも霞立をか

此月を何望宗府蘭の丘結ひ
此の吟や雄丹まえて作り置けり

名立ち二川立てくも瀬田の月

名月やつりさしの葉漏かしら

百掛けし物の果てし濱井の春
常陸の海かな我都我体にして

明ほのや土も我も三ケの月

望田十六夜の辞二月　今見てし
小子庵

鍬取て立さしかゝ浮む雲
ためしなきさく梅月の雲
春霞はたる白角も龍をまと家の内
依て香虫月傳網笠の窓をまと家やとして
字知の路の月や
月さしひと以螺ヶ嘉の咲蛍
付句の初と勧進僧まえて無里
蝶の下のころや立傳ふ物寺
付句の目出けふ手庵りて無里
坊

祭ころや寝りふしき顔こゆし
付句の歌秋の集とせて無里
寺
踊りはく靄顔あろ月見の宿
付句と庵衛てあそぶ結ひて
根出有江との口号あるよし
三か月の地に晴か里ろき留
付句まと三ヶ月の誰そ今も発こし
深川の五本松やえ子舟をさして
川上と此川下や月の友

十六夜もまだ更科の郡哉　翁

敦賀にて

名月や北国日和定なき

漁火のちらし[illegible]

つるがの[illegible]細音の[illegible]

一[illegible]あさむつの[illegible]

あさむつや月見の旅の明ばなれ

玉江

月見せよ玉江の芦を刈ぬ先

湯尾

月に名を包みかねてやいもの神

燧山

義仲の寝覚の山か月悲し

月のみか雨に相撲もなかりけり

今宵誰よし野の月も十六里

米くるる友を今宵の月の客

十六夜や海老煮るほどの宵の闇

[illegible]初霜興行

[illegible]や[illegible]霜の[illegible]

九、あひ越ても月の七ツから哉
古梅 睡山亭
月下手透暁
月はや瓶おさめる児の信
出るや池を免かるゝ挑も流
第仲有にて
三井寺の門あくるや時の月
播柳の末の雪之の名残哉
廿六 柳に中かりし春の雪のなごり

三からや去蝉の文つむかん
比一村近江の末まで松の姥の嘆ありし
廿三新 諸松の回陽ゟ哉
来るや寒梅の里の比信おくる
きぬきぬ句には集に見ゆ梅の里
戸をひらき雨に山を伊吹山かな
岩まもよし夜の雪まもうらみ見孤
山の恋あり
廿四 信かたも梅の中伊吹山
いり山中まかせく二句
名月や梅もかく新香や田の白雲

谷の白菊かな見えて福ぞ多き事　帰江

虫

多見ゆる雷雲ふりし虫の声

聴　果　頭具の名右京の宮開かれしも見ゆ　先哥かんわしく果や

暮虫の声聞きつゝ来る瀬の草の露

此付の庵の集まりかなきを塩かりて

出来たる庵の深川の庵あるらし

中々世は花の花や身がらしき草の上

望月にゝく

あきの風さへ雨をもふ月のかぜや

胡蝶まで我ぞこゝ秋好みる芙蓉哉

麻木来てく鮮すへやきのさく波

白

雨降ねく桃の木や枝のさく汲

旅に出小松かりの[illegible]毎田の神の宮

摘かへしつゝ実生えの萬のみの

小梅かき立おらく鮎のきりかきせき

るおもう海の虫の膝と見えして

むさんや我里の木の枝さく汲

多　田中の法蔵寺にて
刈跡や早稲かた〳〵の鴫の声
　堅田にて
病鴈の夜さむに落て旅ね哉
相の本り鷺あしらふ塚の月
稲雀の茶の木畑や逃どころ
声の色ありて水鶏の四十から

芋の葉
芋色くおの〳〵草の色かうかな
菊　清如水茶堂
やな里や木の実落葉の実ひろふや
は　もちい城
船かける里帆かけるふねの出て行なる
　此句は此の割有里とて東人かさね
実名まで書くほど

はま荻聖なしくゝ嚊乎南さ関相なる

菊

菊の露落て拾へはぬかこかな

十六夜の月と見はやせ残る菊

稲こきの姥もめてたし菊の花

痩なからわりなき菊のつほみかな

菊の香や庭に切たる履の底

是なのあれや里々の塀の菊

琴箱や古物店の背戸の菊

此句去年の物語して行ぬ

草の戸や日暮てくれし菊の酒

此句乙州一樽を携て来りし

時なるへし

草菴の菊

越

あかる菊はのりやれの袷

加州山中　童陽

山中や菊は手折らぬ湯の匂ひ
菊の花咲や石屋の石の間

木因亭

隠家やまつ菊と月と田三反

奈良の重陽

菊の香や奈良には古き仏達

くらかり峠にて

菊の香にくらかり登る節句かな

左摂亭

はやく咲九日も近し菊の花

イ二 ちや〳〵トニテアルトアリナルガ 田 アンズルニアヤマリカ

難波某の亭

白菊の目にたてゝ見る塵もなし

此日にハ歌仙有

芝柏 母宿

[illegible]園の室[illegible]菊菜の[illegible]

畫讃

梅咲て日まし〳〵猶都華の芳哉
木　守紹
挿や翁か生ける薗かつら
鬼竹
深りつけて寛永たちおもて私たる哉
青頬
鶏殿や丁の井る時分をあり〳〵し
蕉りし
凉川　扣遊

あくてもある鷹猶有かな
此句にて歌仙を凉川集に見え多里
葉名　唐
芳の戸かさしや穂薄か〔?〕
信州加賀山中　二句
蕎麦をあいて蒼くもなお山路哉
松島や志らぬ木の花の香を経
あつきて
臥以中おく風をうつし
抱康

野分

我もかくもり姉か旅か里のみか
秋のくれ（かしこ）ゆきよ

稲妻の夜の海辺行秋の暮

こゝろなき身にも哀もさしも秋の
此句西行か海むきの暮
画に此海立ていまそかりし像ニ題

人声や此道かへる秋の暮

此道や行人なしに秋の暮
大坂清水茶店四日方にて

松風の軒をめくりて秋暮ぬ

早稲の香や分入右ハ有磯海

白川首途にぬれ行や連

[illegible]

一家に遊女もねたり萩と月

[illegible]

此二句細道[illegible]

[illegible]

秋　ある草庵にいさなはれて
秋すゝし手毎にむけや瓜茄子
　敦賀の色の浜にて
淋しさや須磨にかちたる浜の秋
　宇草境
[illegible]
　悼松倉嵐蘭　[illegible]
秋風に折れてかなしき桑の杖
　初七日詣墓
みしやその七日は墓の三日の月
　[illegible]
　望こ官
望こゝろ[illegible]
　[illegible]　知足亭
大きなる家や[illegible]病者の秋
　画賛
西行の草鞋もかゝれ松の露
　[illegible]

住吉の市

枡かうて分別かはる月見哉

車庸云

おもしろき秋の朝寝や亭主振

芭蕉菴翁 車庸亭にて

粟稗にとほしくもあらす草のいほ

元禄二のとし秋美濃国大垣
如行亭にて送りつ送られつ人々中
好道の中にて
毎ふ何

はまくりのふたみに別行秋そ

伊勢ニハ卅一日おかみ申て外宮の遷宮

おかみ侍りて

尊さにみな押あひぬ御遷宮

廿末日相賀集行

秋り涼しく行すゑや末は小松川

爰の住素牛ニ大垣の旅店

如行何侍るにて

世の中は常に寝にし秋の暮

梅の実は俳諧ならむ花の跡

きぬゝ

猿引は猿の小袖砧きぬたかな

又 麹ならぬ毎き乞淋架ゝなかな

鄙 しゝ使

冬枯や秋ならぬの梅久なるかな

おめくの送りつ果は木菖の秋

はぜ草や梅は日影なかり秋まで

蓄きけちゝ梅毎さゝ角力かな

稲雀葉の木角や述 新

秋の夜や山家も毎夜も雨かな

菊の清大招の外はゆかし

梅の実茶むくの袴着や三里

野 秋はなんゝ年ゝ添ふ六斤

山ねこゑ蒼林の庭の黄葉ちりく
暮ハ秋のけしき哉　、
桐霧く秋の終や暮の霧
行秋の露毎のもやまさかも
行秋や手招度ある栗のつゝ
秋もなやちる里の影
行秋や母引海あき三布梅え

秋梅のつらさは今
惟吉　杜、
傍風も吹てく暮秋数あるよ
諱か子乃
野菊も迎寒てく相の首の
須行あ淋しかり

泊船集巻之五

芭蕉翁拾遺稿

雒陽 風國撰次

冬の部

しくれ

島田塚本氏に詠草有

馬かたはしらし　時雨の大井川

御しりを様と小笠原とやしろへ
かゝふ人のもと年よりわれしられし
島田の宿まで
宿かりして落ちけるは志る事まぼろし

不二
一庵抱ハしめくみなしのまる
明里能ふきそゝり

志賀の山中田乃あるしきの黒ゑ櫓
諸人やかふれこそまん細露
まつらし一雨の後呉竹ゆくら
世の中かあるとさしふ家族のしつかさ
時自ふくまと世の中に落口絶えし
流されるる草のうつや浦のなるゝし
きり花
まつみのはてし

雪

深川大橋半かゝりける比
初雪や掛かゝりたる橋の上
初雪や水仙の葉のたわむまで

大仏造営とゝこほりて
初雪やいつ大仏の柱立
たゝ雪や聖小僧の笈の色
初雪や幸ひ菴にまかりある

深川八貧　又ハ今思へ
米かひに雪の袋やなげ頭巾

深川夜雪
酒飲ばいとゞ寝られぬ夜乃雪

對友人
君火をたけよき物見せん雪丸げ

兎も角となりてや雲乃梢尾花
ひらけば鳥と雲のながしなゝ
豊田御造宮
とりたくを鏡とぞ清し雲の花
出ぬん付て雨見まかる紬子まち
雲とかしすつるるべし使力の南
雲とさるやうらひ師走の名月

此句は尾花中にかきくとかなる
わかれるとて
いかなるも雲尾に古絵にあなまし
山中にして芸也あるらひて
雲乃中ニ兎の陰を姑々とまし
山所書賛
貴きや雲隠しぬ月と羨とも

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈残し

顔黄ハ重し呉天に雪を見るならん

此句ハ返生の比乃吟なるへし

大切し

あらし乃句ハ弁弁に細せるなる

道の記にハ此句としるしとあれなり

後ハ桂句のえにあらぬなり遊びし此句を五哥仙

有冬の里ありて是なり

風や顔ありれ痛む人乃顔

あらしに宿取なる杉間の南

三河 芭蕉庵

京にあらて此句のうしや冬の稲

こハ耕雲別墅

あらしに句ひもあはれし端乃舞

冬籠了

冬籠りまたよりそはん此はしら

志はし隠れける人に申侍る

先祝へ梅を心の冬こもり

金屏の松の古びや冬こもり

寄

千川亭

折〱伊吹を見てや冬籠り

贈洒堂　詞書前の巻に見えたり

難波津や田螺の蓋も冬こもり

深川冬夜の感

櫓の声波をうつて腸氷る夜や涙

天和の比の句なり

落葉

留守のまにあれたる神の落葉哉

江 [illegible]権現にて

ゑくよかこの名おちらせ落葉川

明照寺にて

百年の氣色を庭の落葉哉

おなじく

たふとかる涙やそめてちるもみち

夷講。

恵比す像[illegible]

振賣の雁あはれなり夷講

御命講

御命講や油のやうな酒五升

大根引

鞍壺に小坊主のるや大根引

埋火

埋火や壁には客の影ぼうし

追善

埋火もきゆや涙の烹る音

水仙

水仙や白き障子のとも移り

其にほひ桃より白し水仙花

寒菊

寒菊や粉糠のかゝる臼の端

大津にて

三尺の山も嵐の木の葉哉

ふるゝ[illegible]しのひし

霜の後撫子咲る火桶哉

口切

支梁亭

けふ切に境の庵はしあけしな　ら
姉ひろきや松雪折紙簾の夜哉
あられ
竹の絶し紀青や霜の指の月かな
雑水に琵琶きく軒のあられきての菊
かけ
河ろ何ともあきたる女はるを娘しけ
紀行二月の日し

熱田にて
あそび来ぬ鰒釣かねて七里まで
此紀行に超其の此後山家集乃題外り婦
一やきもおかぬ葉の色つふ

星崎
星崎の闇を見よとや啼千鳥
星崎や闇を見よとそとしきこえぬ

いらこ崎

鷹ひとつ見付てうれしいらこ崎

ある人乃もとにて

麦はえてよきかくれかや畠村

詣杜国配所

すくみ行や馬上に氷る影法し

さむきそ

蔦にあらしひゝきてうすきさむしろ

旅宿

こを焼て手拭あふるさむさかな

越人と吉田乃驛にて

寒けれと二人旅ねそたのもしき

笈日記に初五しろさゝあるね

其後越人へ申つかはし句

二人見し雪は今年もふりけるの

霜　人の茎は芦何ねて

さしくる程あき来の末の雪れの笹

此句落句にハ道枝也しらぬ花ならまほし
あひ居のとありぬさかやまるほかるべし

葛の葉のおもて見せけりけさの霜

雪の跡草清とこひて

花となれて哀しさのほか草の種

病中

葉のむさしては雪れ乃まくらこれ

探梅　隅川亭

香は古白添桜ま〻みたる新しての香　梅

折としてむ入さしつきむ先　椿

大通菴の主道気高花は咲る
急さしきゃうしまえん事とある
きりしかは濁る手そのほとまつとて
都文と一茶乃霜と降りぬ今日ハ前
とさつりはあらしてとこふとさして

其ころ見えしや枯木の枝の先
風来る
藤若ひらり新しく搭ねの子
当朝川うつ雲月輪の白浜川
の四十まてのつら毎年まて
都なて神を祭ねの白妙うれし
またち毎とまた

長崎の塚をめくりての絶毎なる
納豆まぼ青志けまて銘木を記
埋もしわすれ
さ川ゆく年毎れをる桜毎の花
古の忘毎のゆ年の浮世しまき
し別の新完年て
人まかそのえたて家ハ年わすれし

葛はしひ
蕉門人の僧
見や其の碟して乃きまぬ古格子
煤掃乃説　今昔之小文庫
煤之ゐや鳥のゐ行雷のころ新
むし掃ハ毛ゟ柳つる大工乃柱
膝行

煤之宿や柏の古ね写乃嵩ゟ宗
膝なりしゟ見ゟし世の煤もへ
顕しし行
かしの錘もあるや乃瘦もこその中
月見乃墨ゟ針と仏ゟこの入
馬ほとし飛ゐ後すゝる枯ゟれ
ゝのゟ
麦野の女とあれゟとれし

貪山の峯ニ雲ま帰る あらたし
氷若く僵蔵ま明とするとせり
右ニ月ハ次韻の法の昭ふる趣し
住 僵ての鈍猿の面や垂火焼
毛衣し包みてぬくし鴨の足
西ふし雪ふやむまん冬の扇
前燒や寿き輪の田井のゝね

冬こもり煖まはむ足るとさしら
としみ多様
月白紀師走ハ子路さ寝に見るる
このうれ亀鳴師走の海の鳰(カイツフリ)
行とその帰きの帝と行うし洩
先う歌ら夢ふくしひきとのうし
こしのうしれ之
めてたさ／＼の春ふをいらん花のうれ

分別の底たゝき鳥ゝしのくれ

盗人にあふた夜もありとしの暮

月雪とのさばりけらし年の暮

塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店

魚鳥の心ハしらずとしの暮

枯乃生るゝ気あきとしの暮

ふるさとや臍の緒に泣としの暮

年の市線香買に出ばやな

女節季候乃来れハ風雅も師走かな

節季候をすゞめのわらふ出立かな

有明も三十日に近し餅の音

病中の吟

旅に病んで夢ハ枯野をかけめぐる

死かゝる斗にハ枯野をかけまはる

雑句

ゆきゝよきと誰まつしまや枕ゆかしき

是ハ路通かりのかなしひの
別ならんと云もしぬ

杖つき坂

かちならハ杖つき坂を落馬の事

泊船集巻之六

此部よりこゝにあつむる文のくはしきは
家の集章と拾ひとりて追加とさだめぬ
元禄十一三月上旬

洛 風国撰

春

一とせに一度つまるゝ薺かな　芭蕉

畑うつ頭巾呼ゆく若菜つみ　其角

若菜つゝあとやろうさん俵　去来

若草し初音つもりや飼鳥　野坡

踏ならす雪の動けハ若菜かな　惟然

あなハよ春としく聲のゆるしかな　風国

菜の葉ほむ河らハまたわら　鉄人

梅

おものさしあそふよ梅ハちるいらし　惟然

宮守ハうつの手梅のくらしわか　越中井十三　林紀

雪ハまたあらひ出る梅の花　ぶんご　西六

花見し初ハしるさむかるの花　風国

梅干乃花とそとしむ小僧の花　さいう　為有

身ちなる梅と云うら桜の花　舎羅

鶯

宮守ひまや罷ちり聞の隙　其角

鶯ハ老の乃松さ戸なうれ　李芳

鶯ハ日ぬいまくと及ての　糸拙（みんこ）

うくひすや梅の中よりそつてくる　幽泉（おかしく）

鶯のあらく啼きもむくゆうる　林紅

鶯乃啼あらし杜の葉細かな　風玉

如何辛みそ

鶯や葉と柳にえる森の花　露川（ヲハリ）

柳

ほんのりと月のおぼろや柳の中　野坡

糸柳葉ましるえ野雀のかけ　可吟（三ノ）

秘蔵する柳ま乃あるおしさし　東鵬（三ノ国）

朝明の菜稲細ままとる柳かれ　凡玉

大津なりかくの芸いかに
芝つ母の皆うら里人のこゝろ

甘井このとこや松の花のことき　蓼和

唯継いつおりは

木の柳しきもしら雨や風中　常雪

帰雁

春ハこひし雁よあはれとちる花に　野水

ノの花おほろしや何百里　士芳

花

花さかりの大服中にやせにけし　杉風

木の空のつ猜よふかハむの香　青車

川おくの奥に花まつ峰や山桜　長サキ　卯七

立ちとり花見やしるきて田織　いら　卒袋

くれのはやあらきゆしもとれて花の蝶　日　野雛

春の輪をつきてよしたや山さくら　支草

ちる花の后やそろへ切とうひ作手　魁人

あふさこの山の楷の色もりまり　大つ尼　智月

若住生抜けたハ祭りあらん
なとしたりしましけり

さき続くらふ影も踏一はせの陰　風国

ちりこめる花や槃若の紙乃間　去来

雛

桃さけやひとふる雛子のあさしほ　イカ 百手

遠乃よき草紙て雨静くの春　圖解

ほね折て家業まう御るつまかな　筑紫黒崎 鞭童

とふしなき雲雀の中や山路哉　風玉

鶯もしれす啼けりやさし侍雛子かれ　イカ 返之

おぼろ月

東魯町々夜やこゝろを送りて

手をたれつ中ふ落なかりおぼろ月　去来

圓城なりしあそひて

石山へまゐりとゝる晴月　風玉

義仲寺をたちかへ

師の庵にてえん鳴の勝月　奥州二本松 惟氏

庭鳥乃哥をしらぬおほろ月　日田　紫道

雪国とおもはゝ猫も出よ　惟然

ひゝん猫の恋しら魚胡て　ちくぜんくろさき　水札

戸障子の開くもしらぬ彼岸だ　六〻ヒタ　花吉

河ほそき地にあらつかれ猫の恋

志らぬの藤や抱さうひ　直中

石まくら観音ぬくしこそぶ　ヲハリ　杉下

重三

雛まつる店よおちるや娘の子　六〻ヒタ　里ん

性かゆる宿とる桃の花　カヽ　小枝

出水や箕流れる出かはりて　之角

野あしらひ

冷汁の海苔に夏まつるさかな　ヲハリ　和泉

ちらしとくるいね寸風　伊勢中　好風

春もはや八人(二十)桐のこゝのつ花　越中 常青

花さくや黒とおもしと甚の枯　文子

山ざくら青き流しもさ昔ふる　文彦

このうちの霧の香乃あまの部に出たりえ
紅れんくわしぬ

夏

奥州今此ところ河までめる

早苗まとひつゝいふる黒き日数かな　芭蕉

郭公

郭公行くちる后様をくゝり　正秀

見こんなまして、の都のさ叙　文草

横雨のさや山かし乃鐘公　李東

終とし紙とありしやまのさ叙　難波 祖竹

ほとゝきす山田の水をまかせけり　抄中廿浪　浪化

涼み

手さはりのよしや袖なる霍公　風国

鳥声ハおのゝ餅食ひ部し公　方有

子規なきのねくあるぬ日数かな　朱拙

灌仏

灌仏や昔をきけは二千年餘かし　諷竹

鳥

うくひすや鶉のむしもせ早朝か　浪化

やましとは鳴明らかにけり　丈草

白鷺の人遠さかや雲の中　左次保　情女

卯木の里の書懐

そのうゑの花や水鶏の磯の間　丈草

いとしさへ聚をもつ枝ゆかし　如半　北人

朽物をしへとえて帰鳥でのふ　嘯風

さくつまぬ黒しゝ夏のかとらぬ　浪化

青鷺や世はしらぬ田植くさ　正秀

われら人

一まつは老へとかるゝのくらやみを　越中井波　路健

囲のふもとしぐらく牡丹のそでさすよ　此生

本堂流

志ほらしき草花のそでほそさよ　かんこ以縁　曲風

竹の雨と蛍くさゝや冬の音　正秀

曲りの弓とりぬみて

呼虎ハ芸見て浦みなのさわらぬ　木導

杣の鳥神るゝし

冷酒よりもそ類ゐそふかりるゝ　蔦青

一更衣

少年の見ゆる行末や更衣　　孝女中樣　峨山

子を持ば猶も気に見し更衣　　三河　白雪

蝶しろうみ笑しよ空紅　　野坡

画恩上人にまいらせし

さくら花こゝら絹をきせて空紅　　大つ　智月

木曾塚にまいりつ

こゝろよの見えてさもしき夢ちり　　南部　玄梅　五律　路健

枝の見ゆるにおかしくの蔵りかな

高舘にて

卯の花に兼房見ゆる白毛かな　　江戸　曽良

五月雨

さみたれの庭とくらるや稲ひかり　　去来

八幡詣とまうる

さみたれや植田の中のかいつぶり　　泥足

五月雨や空紙くゞる日頃の露　　風国

さしあまや風つよきさ東之を松々　京 吾仲

ちまきに

蟻　揩

為有の草畑　為有

稲を切る君のはてしもまゝならぬ

日浪も来ぬまこし屋の乃わりかな　コハリ 小楠

揩や重まさし影

[illegible]の跡　左礼

夜桃さ庭をのこるや為有

ひつそりと田うえの行る(?)の重宿かな　如行

えんこ昌　可暁

いさゝかの作となりし亀麦の跡　去来

夕ぐれ

中ふかはしかわる竹の蝶　丈草

あつさ

石となし脈まで蓮の葉の庵　ちま

雛乃あみおも重こゝ手まへかつきず　風雪

脇句

こゝろはあるまじまゝ日の別れ　武峯
玉にさへ
黄なるよ西江の麦の刈仕舞　惟然
惟然にまうし候
うぐひすはなりふの細道はおもひあり　弥市今石動　澁吹
惟然にかへし
またかれは堤や又はらつゝぬ麦の秋　弥市あらて　捨員

おなじく
秋ちりぬをかるれの絃とられ　おなじく　路青
夕涼ミ
つきさす帆（帆）になる袖や夕まくみ　武峯
海の果て奥ろしもしむ涼しさぶ　いつかた年　玄峯
桐かるゝして
山門に里にと春やか寄人　風生

いそかしな峠を出ぬけるむらしくれ　游刀

紀しもく

ミかつきやあさかほのはなのかし新わさらし　素堂

秋

かし小要し

ねまりこし行人をおうしや雨の萩　巴銭

秋雲川や鷹のとや毛のさしのうり　浪化

おとろしちさゝやるゝ蜂とゝ　長サキ　魯町

あきうせ

あさかせや初織はまる小鋸指　小桜

猫さかやなうゝゝそゝる秋の風　西秀

うら鳩笠をつまそとゝるや秋の風　去来

さるは見る金剛山をあちの風　舎羅

初秋の部

二つの月の秋を運ぶや草の上　風之

七夕

秋といふ七夕の夜の明ばかり　猿雖

昔なれてや舟のなかにも草の綱　風之

燈ろ　蜻蛉　蟋蟀　粟ニ稗　虫

雁　ところてん　早稲　菊　荻

なくものの名もしらぬなり虫の聲　大つ 嵐白

かうこ 酬ゝ 月見の夜はともにまつらぬ涙かな　かた王堂 月性

山角は思ひ倒さぬ出たつの鴨　かたゝ白田 野紅

蜻蛉や日をあそばかり猿に乞ふ草　ぶんご塚原 頭水

蜻蛉の休みてかへるは一葉かな　かたゝヒタ 篤行

星空のいそぎて晴るる稲の露　ヲハリ 東推

早稲の穂をゆすりてかへす秋の風　ヲハリ 湖雀

蟷螂のむくもうしなや秋のくれ　可庭

稲の中なにに　玖珠

蟷螂や拝くふるまふかな　十丈

備中高梁

あはれさや露草の雁かへる　重行

おおつかの匠

秋しるさ風気のいやたばこの色　如水

備中総社

夕雨やけふは去ぬ虫の声　七洲

玖珠

山しとをはまもるもみち哉　可咲

ヲハリ

身をしる鳥や人見る萩の中　夾始

美作

肥後小国

蜩やまはまちぬるしうの秋　源匠

青はまり

ほつりと鹿を立るの秋の暮　一酒

空竹

櫓の音けふそひて

舟のかけのかりきと跡かしり秋のくれ　風虫

ちつつ

四十九

中島は蔭つゝきはしらつゝれ　　彦根 霧川

夕月をあふ毎に手ふとやつる　　惟然

行月をさいはしつくる四手かな　　朱拙

粟の穂やうつらとまねく秋の風　　[illegible] 舟拙

霧

ほつかりと紅葉に見ゆる霧の中　　京 芦角

見る内にそのまゝしくや霧の松　　[illegible] 麻夕

草の露

女子繪に業平書けり草の露　　朱拙

八朔にそゝや〳〵と草の露　　野童

月

悼遠流の天宥法印　　芭蕉

その玉を羽黒にかへす法の月

摘見よや義の路の草の味　　惟然

川そひの畠をありく月見かな　杉風

名月や灯屋をさける馬の面　行露

けふの月隣とも呼ぬ出可し衆　女 秋色

三夜の月

三ヶ月見る夜はあはれなる月の光　ふいの 土芳

去郎
空世の鹿のくる明うしてたつ楚にあそし
やされつると おあひもなく

生酒や宮者の床とのゝ宴のし　丈艸

明月や志賀の稜田乃梅の実かゝる　去来

かこのいゝ傍りまし

鳥佛きゝかゝうへの傍り乃月ぬかゝ　十山
そうま 順路
宿一るこ遠

名月や松葉とつくる山の声　作へ

酒田夜泊

むかうれを盃まゝ月のさくし　すよ　惟然

鳥落人ゝ紅葉さゝゆ

名とり川のあたり蔵馬や稲の中　　江州八幡 素児
　旅人をはさみけり
日もくれや足上られてあそくれ
なかしかな　　むね鶴の里 素翠
菊の香や奈良はいく代の男ぶり　　芭蕉
　筆巻の讃
折かけは酔てあそぶ草のさかりかな　　仝

雁鳴て月を明る家のつかれかな　　土芳

冬

風雲や時雨をくるる比良おろして　　丈草
海山のしぐれつるあら蓑の上　　仝
山かけの里からみるや白しぐれかな　　支考
行きしこの身宿り袖に不志かな　　野坡
旅の世のなかりしきや年の暮　　許竹

酒によるりんこいまにのまなくかな　さう師ぬ

さを鹿の身すくるところ時雨かな　かんこ田　芙芝

金閣ちらして

志つこのさい前まで石としぐれけり　風虫

水仙やあいは時雨のつもり来る　備中高里　大丈

雪

九重は見なれぬ雪の原かな　去来

さりましやかりつむ嶺の雪の雲　玉芝

ほをこりやみえてなりゆく雪の雲　ちくせん黒崎　沙明

奥州あるまはく

薪こりもしん前を雪のちるま　作殺

初雪うしのうれあるとう落葉の上　風虫

雪てみるのとか暁しせる月夜かな　沙明

六つ目の雪のくらみ果のゆめ　浪化

雪の道ふみ分けの[illegible]よ　京 芦角

冬されけれ春の子冬しの日　こゝろ

冬こもりや鷺ハしら雪のはすれ橋　象我

冬こもりに身を寄せてやこもり哉　備中こ里 風虫

小鳥のつまよらけとらあはれ哉　梅山

丹波路ハつまさ腹に春の山　大ツ 梅舟

勢母の所まてしめや冬の月　ヲハリ 素笑

皆晴れし月むかしより見るかな　玄来

こゝろや落葉に　雲　子鳥

あらしみに雲より落る木の葉哉　ヲハリ 左次

此年所乃雪に声は落葉かな　霞川

こがらしに吹れてくるや笑この命　いんこ日田 野紅

初霜や橋杭こしに吹しかな　備中こ里 一村

きつつねの吉原の声　寄枯れ　吉縁　備中 好風

題しらず

凝幅や袖の中乃いさり雲　其角

茶の花は見んとしてまた日数かな　ぶんご臼杵　頭角

枯野から月出す川ものゝ小松かな　ぶんご日田　沂壺

橋しや暮いそかしく紅葉見舞　孤雲

冬草は散ちかしや鳥の声　訥竹

大根引

起乃まゝ乞ふりなの大根引　みの関　一年

出て猫して菜のあらそふや大根引　大虚

ゑおもひの師道へ向ふ大根引　鳴海　知足

今様をおもふぬいさらひし大根引　川雲

持く猫よこゝろかりけり

舟ゝ南波を人あはせる大根の南　去来

猪ゑらぬ年

ひやうんは去つ芸つ津くしな　為有

裏門の竹に訪くや鉢扣　丈草

横町の噂とてまづ年の餅　桃隣

仙台

行年を歎もしらぬ市の人　風国

年よりも年の尾頭の浮かれ　去来

大治和集撰工へましける
は遊佐とさくらく
一露治ふまし

西行の庵もあらん花の庭　芭蕉

みんなの西遊象娘をとらし
なひらるゝにやましぬ

入相の山まはるゆるやまひかふ　風国

陽炎やひさしに枕当くあり　洞重

春風や青砂をとしく鷹の形　日田　幽泉

菴室に婦しる炯りや蓬さら　豫中乃里　渭白

夜舟に笠きて出川し名残の華　日田　朱桃

まるい雨しれるゝつゝや五月晴　豊中乃里　北人

寂さうにまろつくとのも見えけり　そのはらの　元澄

又しても百日紅の花あかり　豫中今石　温啓

如月や[?]松へ[illegible]地の志る　豫中　[?]風

霧年や隠とおそて雲の形　豫中　萩人

笠うのまへくやらや山乃上　豫中　林子

一畦くらんかとおもてふるまな　冬乃井中　水札

穂もにほそこほしつかまる田まかな　[?]　曲風

蜻蛉の体みてかろし一揆うる　九日田　黒沢

餘[?]ふ[?]不[?]鶴船　日高　呼下

初あをくしろつき[?]福の中　豫中　路徒

秋風や結ふ恋の綾めくれ　文化日田　野紅
鍋夕しくれる光るゝ踊の笛　小女　つゝん
むつまじき聞く声や何の鹿　星崎加年　柳意
行あるやねはつかしと水縄に　文化日田　芝角
一雲吹風りゝ馬の線　文化琢珠　至水
鳥て飛くなりつまつゝ雲野辺　豊前中津僧　梅山
綿々細お無ひ切なる竹のすゝる　柳堂

薄ぐれしゝふりしてかゝる柳かな　肥中台星　十丈
涼しさや床の葉すゝまする何者庚　ゝ綾さよ　沙明

長崎より来る吉事ぞ出申ぞ
小舎しけて七夕乃ひる
七夕とよりくやをしの舟躍り
毎ハ漁夫の女舟躍りハ面白なり
七夕ハ黒崎　沙明えし
うち流れいるしひ星霜不浦の中ゐ

長さきに登舎して、

見し人も今ハ語るや墓参り

同所諏訪大明神にまいりて

貴賤京も難波ともなき今日の月

同よりして山家にて

山家にも魚喰ふ上に早稲の飯

是ハ[illegible]村のうたひ路へ

盆の来れ色もさむきや秋の風

同上の名月

名月や亀のみぎはせ千鶴に

おもふころにいつもくれなきを

唇く人

八月廿日

湖雪丈

去来

元禄十一戊寅年
十一月吉日